
パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃうことってあるよね

evangeline

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃう」とつてあるよね

【Zコード】

N4031BA

【作者名】

evangeline

【あらすじ】

主人公は弱い。

よくあるチート能力なんて持つてない。

主人公はある日、高校生としての日常から非日常あふれる世界へとふざけた神様によつて飛ばされた。

飛ばされた非日常溢れる世界は魔法が行われ、魔物が都市を襲い、そして人間同士は人間同士で、領土を広げるために争いを繰り広げる世界。

戦争が当たり前の世界。

そんな世界で糞弱い主人公が、この世界でも稀にしか居ない癒者としての能力を使用して、偏ったパーティを組んで、なんとか細々と（本人談）生きていく物語。

序章（前書き）

この作品は第一回目の投稿であります。

處女作にしては、途中ではありましたが、語彙特に急進云々しました。

-----。 (。、'。)。 -----」-----!

ですが・・・

ただし、今回の作品については消去することは無いと思います。ただ、この作品には途中、意味の分からぬ描写が入ると思います。しかしそれも含めて伏線として行きたいと思つてます。

成後にお読みいただくことを作者としておすすめさせて頂きます。
それから、どうなるかはわかりませんが仕事がとっても忙しいため、
投稿が遅れることもあるやもしれません。

その話は」みんなをいふ
ま（一
一）ま

(よし、先に謝つたし無断で遅れてもこれで何も言われまい)
では、馱文ではありますが、どうぞ世界の道理を超えた世界へ。

（序章）

俺の名前は「佐々木 レオ」という。

これは父親のお祖父さんが、イタリアに昔いたことがあるそうで、お祖父さん、俺にとつての曾祖父の親しい友人が「レオンハルト」と、言うそうで、その話をいつも聞かされていた父親が、煩い曾祖父を黙らせるため、それをとつて「レオ」にしたのだという。

・・・なんじゃそれ。命名された理由が悲しすぎる。

だからそれは無視することとする。ていうか無視したい。

そして、曾祖父がイタリアに居るときに、曾祖母と出会ったらしい、とても綺麗な背の高い、イタリア人女性を日本人の曾祖父が妻に娶ったそうな。

そして、28歳の時、俺の父親を生んだ。

父親は曾祖父の血が濃かつたらしく、日本人らしく、黒髪黒目で若干潰れた鼻、しかしそれなりに整つた顔立ちをした形で生まれたた。

順調に父親は育ち、25歳の頃に、俺の母親と出会い、そして2年後に俺が生まれたそうだ。

そうして生まれた俺は、曾祖母の血を一世代飛び越して色濃く引いたらしい。

生まれた時から金髪、青い目、スラリと高い鼻。

だが、顔の骨格が日本人らしい角張った形で生まれてきた俺は、幼

幼稚園の時から、（特に女子に）人気のある園児だつたらしい。

そのときあたりから俺は頭だけは良かつたらしい。
だが、運動は全くダメだったそうだ。

走れば他の男子に負け、喧嘩をすれば一方的に殴られていることに
なっている。

自分も殴り返してるつもりなのだが、全く相手に当たらず、当た
つてもダメージを与えてないのでやうだ。

自分で言つておいてなんだが、悲しすぎる・・・・。

だが、なんだかんだ言つて、小・中学校も、無事に（色々ありすぎ
て五体無事であつたことが未だに信じられないが）卒業し、高校へ
と入つた。

その高校では1年目にして上級生、同級生がファンクラブをつくる
わ、さらには毎日10通は下駄箱にラブレターと思しき物が入つて
る始末。

毎日朝からそれを処分する。別に捨てるわけではない、（親の教育
の賜物なのかな）そこまで酷い事はできないので、きちんと返答を
書き記して、（あ、付き合つことはできませんって内容ね？誤解の
ないよ）うに言つておくと、だけど。それを相手の下駄箱に返却し
てということをしていくような日々が3年間続いて、（今思い出せ
ば、下駄箱に返しておくと、さらにそれの返答が来ていることあつ
た。なんだか文通になつてゐるような節も無いではなかつた。）

そんなこんなで、ぐだぐだと惰性で2年と1ヶ月を過ごしてきた。

小・中・高校生活は振り返れば長かったようで、過ぎ去ってしまった

これから大学へと進学するにあたり、よつと多くの女性に印を付けられるんだろうなあとか思いながら、卒業式の日を迎えたのだった。でも、普通に過ごしてきた俺には信じられないけど、この卒業式が人生のターニングポイントになるなんて、全く思わない、お氣楽で鈍感な俺なのであった。

・・・いや、俺は自分では鈍感だと思つてゐるわけじゃないことだけはどうあえず言つておぐ。

～序章～（後書き）

読みづらかったので訂正させていただきました。

卒業式（前書き）

今日は、この作品の初投稿ですので、大盤振る舞いで2話もこっそり
せて頂きます。

卒業式

高校生活最期の卒業式。

俺は卒業式が終わると共に、速攻で家へと帰宅する。別に涙を流すこともなく、友人と別れを惜しむでもなく、下級生の女子に制服のすべてのボタンを剥ぎ取られて、逃げ帰ってきた。

・・・いや、あれはもうおかしい。下級生含めて同級生も（・）だが、女子の様子は、猛牛でもひつけりとおとなしいんじゃないかなつてくらいの勢いだつた。

卒業式終わつてすぐに校庭とかに下級生が並んで花道作ってくれんじやん？

卒業生として列の最後尾だつたんだが、終わつて校門を出た瞬間に女子が80歩ほど押し寄せてきた。

俺の周囲5mは完全なる肉壁だつた。

なんかえつちい響きだけど、この光景を見たらえつちこと思つまい。

だつて俺、その中心で押しつぶされているんだもん。

おじくらまんじゅうして、その中心で押しつぶされる人間的な感じ。

俺に密着している女生徒は、忘我の表情を浮かべている。

こいつ、危なねえ・・・とか思う暇すら無い。

押し寄せてきたと思ったたら、一斉に手紙と花束を手に押し付けられ

た。

それぞれ日々に別れを惜しむ事を述べていたようだが、はつきり言ってキャーキャーとうるさすぎて、何を言つてゐかは聞き取れなかつたけれども、聞き取れたりではこんな感じ。

「レオ様私の愛を受け取つてえええええ！」

「レオ様私も　大学へ進学します！」

「レオ様行かないでえええつ！」

「レオ様ああああ！」

「レオ様、キスしてくださいいいいい！」

「レオ様、私を天国へ連れて行つてえええ！」

「レオ様私のパンティを受け取つてえええ！」

・・・・いや、確かに最後の方はオカシな言葉が聞こえてきていたけれども、これらはきっと冗談なんだろう。ていうかそうであつて欲しい。

うん、まあ、これらの言葉は基本的に無視していたから押し付けられる花束やら手紙やらは作り笑顔を浮かべて受け取つておいた。

途中、押し付けられる物の中にパンティとか、ブライジャーと思しき布切れとかあつたけど、それはさり気なく捨てた。

卒業式の日くらいは笑顔で彼女たちと別れたかったから、笑顔で捨てた。

だつてそんなもん受け取った日には全員が脱ぎだしかねないもん。
それは勘弁して欲しい・・・。

これでも俺は平和を望んでいるのだ。

だから今まで彼女も造らずに無難に高校生活を過ごしてきたんだし。

ちゃんと、話しかけられれば答えは返す。

けれども、この顔のせいで本当に友達と言える友達は出来なかつた。

彼女らは、ただの取り巻きでしかなかつた。

らは頭がよい俺を使うけど、女子からモテる憎い存在としか見て
いなかつた。

そう、ただの一人として、俺を対等にみてくれる人なんて誰も居なかつた。

だから、大学に行つてもそななるんだろうなとか思つていた。

でも、そんな人生は嫌だつた。だから淡い希望も抱いている。

大学行つたら友達作るっ!!

でも、現実問題として、小・中・高校生活では友達がいなかつた。

だから俺はネットの世界へと走つた。

ネットの世界では友達がたくさんできた。

ネットの世界では顔なんて関係なかった。

だから家ではネットの世界へと溺れていった。

ただ、現実でもちやんとした友達が欲しいと思つていたから、いろんな人と友だちになれるように努力していた。

だけどそれらは、報われなかつた。

だから、ここからはここでお別れだ。

高校を卒業すれば「イツらとはお終い。

「イツらとはおわいばをして、大学で友だちをいっぱい作つてやるッ！

そんな事を思つて笑顔で花束をもらい、手紙を受け取り、下着を受け流して捨てていた。

だが。そんなことを思つていたのが悪かつたのだろう。

1㍍離れていない女性とから、とある文句が挙がつた。

それは一般的な男子生徒からすれば嬉しい言葉だったに違いない。俺だって少しだけ、ほんの少しだけ嬉しかつたもん。

ああ、普通っぽい感じでいいな、って。

でも、その女生徒が言い出したことが俺を地獄に墮とした。

「先輩っ！――第一ボタンくださいっ！――」

一瞬で周囲から音が消えた。

さつきまでキヤーキヤーといつひつかつた女生徒達が、シン、と静かになる。

俺は偽の笑顔のまま、周囲を見回す。

校門前の家の人気が急に静かになったのに様子を見るためなのか、俺の右側のほうで、大きな音を立てて、窓を開けた。

ガラガラガラガラッ！

周囲に響き渡る音。

女生徒80名程、含む俺がそちらの方へと一緒に振り返る。

なんかよくはわからないけど、ステテコ履いた、おっちゃんだった。

窓開けた音で、全員が振り返っている。

それにビビったのか、急いで窓閉めるおっちゃん。

高校の向かいって厳しい立地だよなあ・・・とか、意味もなく思つ

た。

୬୮

ブチッ！！

嫌な音が目の前でする。

急いで目を前に向けると、ボタンくれと叫んだ女生徒が、肉壁を腹にして、「チラに身を乗り出すようにして、手を伸ばしていた。そしてその手に握っているのはボタン。

あ、やばい。

そう思う暇があつたかどうかすら疑わしい。声が爆音の様にして戻ってきた。

「ずるいっ！－！私もレオ様のボタンもらいますっ－！」

「あ、てめえ、何やつてやがんだつつつ……私のボタンをとつてんじやねえええつつつ……！」

「おい、てめえ、何してやがるー！袖口のボタンは私のだぞつー！」

「レオ様の時計は私のものだああああつー！」

つ！-俺の2000円の時計がつ！？

「レオ様のバッケはあたしのもんだあああああつつつ…！」

つ！？俺の文房具があつ！？

「レオ様の袖はもうつたああああああああああつーーーー！」

っ！？！？俺の制服の袖がああつっ！？

!!?!?俺の破れた袖[か更に半分にざれるたとおー!!!?

「私はレオ様のベルトを頂くつっつっつーー誰にも邪魔はさせんぞつ
つーー！」

「！？ベルトがひきぬかれるだつー！？」一瞬で手品みたいにどうやってするすると

「私はレオ様のズボンをもらつたああああああ！」

— ! ! ! ! ! ! !

! !

・・・・・」の先はどんなことがあつたのかは言わないでおこう。

ただ、ズボンは半ズボンへと化し、長袖があるはずの制服は、Yシャツ一枚で、前を留めるためのボタンは一つもなく、生まれて初めてのパンクな感じの服装で家に息を切らして帰つたことだけは伝えたおこう。

俺の制服は無惨なんもんじゃなかつた。

- ・ 家が女生徒達の暗黙のうちに取り決められた不可侵領域でヨカタ・
- ・

卒業式（後書き）

もし、感想などを頂けるのであれば投稿スピードが上がるかもしれません。

あ、でも上がらないかもしません。

どうちなんでしょうかねえ？w

作者もどうなるかはわかりませんけど、

是非とも、訂正すべき点などがありましたら、感想や、誹謗中傷なども含めてご意見をお待ち申し上げております。

また、すべての感想に対する返答は控えさせて頂きます。
ご了承下さい。

母親

家に帰つてリビングに居るであらう親にリビングの外から声をかける。

「ただいま」

・・・・返事がない。

多分どつかに出かけているんだろう。

ま、いつか。ボロボロの制服を見下ろしてため息を堪えつつも、ま
ずは洗面所へ。

手を洗つてうがいは、小学生でも当たり前のようにする」とです。
風邪を引かないように、予防をしましょ。

まあ、うがいは喉に張り付いた細菌にどれだけ有効なのか、わかつ
てないんだけどね。

でも、物理的に洗い落とすことはできるから、これもしつかりと・
・。

・・・・ガラガラペッと。・・・よし。

俺は帰つてきてから手も洗わない不衛生な奴は嫌いだ。

これは、親から幼稚園児の時に徹底的に躰けられた。

ここまでやつて、一階にある自分の部屋へと向かう。
まだ、午後になつたばかりなのに、既に疲れきっていた。

あ～・・・朝寝しよつかな～・・・・

そんなことを思いながら階段を上がり、破れまくつてゐる制服を脱ぎながら自分の部屋のドアを開ける。

ガチャ・・・・・ キーー、パタン。

・・・・・俺は自分の部屋へ入れなかつた。

ドア開けて、その場から動けずに再度ドアを閉めさせてしまつた。

ドアって嫌なものから田を逸らす事もできる、ウルトラ便利アイテ

ムじやん。

そんなくだらないことを瞬間的に思つた。

すげー。ドアって偉大だ。

半裸エプロン（下着着用）でエプロンした母親が俺のベットで寝てるのから田を逸らさせてくれたよ。

ドアって偉大だな～。

さて、まあこいつう時の対処マニュアルは俺の中でバツチリある。対処マニュアルを頭の中でスクロールさせる。

えーと。

『第1390項：女性が裸エプロンをしていたときは、

家に帰ってきたときに女性が裸Hプロンヒーしたときは、サザエ
褒めましょう。

褒めひがねと、次に顔を赤らめながら「いつ間にこへるはずです。

「お帰りなれこませ、アナタ。お風呂にこまかく・」飯こしますか？
それとも・・・・

「・タ・シ・」

「」まだ来たらあと少しどす、アナタはこの答ふればいいのです。

「 もちろん、お前だ」

「」は凛々しく格好をつけてセツツを囁こまかく。歯むのは
厳禁ですし、

どもるのもいなせん。

注意をしまじょい。

そういう女性をお姫様抱ついてベッドと連れていけばあと
は野獣になれます。

まあーこれでアナタも彼女をGIRLー。』

「・・・母さん、何をア越して言つてゐるのかな？」

『あい？あなたの頭の中にあると聞かれてくる「幻の彼女とのイチ

ヤイチヤ日常キャツ

「キャウフフ読本」に書いてあつたことを読んだだけよ。『

「ツー？」

思いつきドアを開けながら叫ぶ。

「なぜ母さんがその本の所在を知つていい？ その本はバレない
ように今は使われて
いないアナログTVを分解して隠しておいたはずだつ！？」

「あら、お帰りなさいませ、アナタ。お風呂にします？」飯にします
す？ それとも・・・
ワ・タ・シ？」

サラッと俺の言葉を無視されたので、できる限り冷めた声で叫ぶ。

「息子を喰う母親がビコニコる」

そつこつて軽くチヨップをかます。

「あら、母親を喰う息子ならワタシの田の前に居るじゃない。この
前だつて昼となく夜と
なく勉強に付き合つてあ・げ・た・の・こ

「俺は母親食つてねえだろ！？ それに勉強は確かに昼から夜まで教
えてもらつたが、

学力向上のための真剣なものだつただろうが！？」

「近所の誤解を招くよつた」と書つてんじやねえつ……」

そこまで言つと、俺の胸につきり息が切れていた。

まあ、運動できないし肺活量もそんな多い方ではないのでしょうか
ないと、俺は諦めている。

「…………なんだよ、母さん？」

なんか目が虚うだ。なんだかう?

「……こやあ、そこまで肩で息をするほどの血分の欲望を抑えなくてもいいのになつて思つて」

「ツちつげえええええええええええーー！」

生まれてここまで叫んだことはないつていうくらいには叫んだ。

ヒヤ。

いや、まあ、引きずりだすときによくエプロンがずれて下着が見えたりしたけれども。そこは親ですから欲情なんて一切しておりません。

・・・断じて。決して。誓つて。命を賭して。

・・・まあ、欲情したかどうかなんていうのは脇に置いといて。

こんな感じが、ルックスがビックリするくらい言われている俺と母親の普段の「ミニコニケーション」であった。

そんな母親を引きずりだして真っ先にパソコンの電源を立ち上げる。電源を立ち上げている間に制服を脱ぐ。

と、そこで氣づく。制服ボロボロじゅん・・・・。

ていうかなんで息子の性欲について興味津々の母親が俺のパンクな格好になってる俺の制服について、何も言わないんだよ・・・まあツツ「むべきはそこだろうが！

そんなことを思いながら隣に立つ誰かに空中でなんでやねん！的な感じで手を振る。

ポヨンフ

そんな擬音とともに何かが手に触れたので横を見ると・・・

「きやつ。母親の胸を揉みしだくなんてダ・イ・タ・ン」

「音もなく息子の横に立つんじゃねええええーー！そして俺は揉みしだいてねえだらがああーー！」

思いつききつ母親の下はあらうかという胸にツツ「ミニを入れてしまいましたとさ。

・・・笑えねえー・・・・

母親に色気があるのは大いに結構。だが息子にその色気を向けてないで欲しいものだ・・・。

まあ、今度は母親との漫才をつっこけるのも面倒なので、そのまま後ろへと押し出してドアを閉めて、鍵をしつかり締める。

なんだかんだ言つて制服が脱げてないし、帰つてきてから10分以上経つていた。

ため息をつきつつ制服を脱いで部屋着へと着替える。

思えば、2年くらい前から家族の前ではこんな感じのノリになつていんだけつかとか思いながら部屋着を装着。

2年前といえば、ネットゲームとかを始めた頃だったなあ・・・と懐かしむ。

あ、やばい。周囲からめちゃカッコイイとか言われる俺がじじ臭い考え方をしている。これは早急にパソコンで解決せねば！！

そんなことを無駄に一人でテンション高いままパソコンの前へと座り、一ネット（情報）の海へと一潜つて（繋げて）いくのであった。

あー・・・。

なんなんでしょうか、このPV数わ・・・。

投稿してたつたの半日でPV5000とか、ニーク100とか・・・

（なんかめっちゃ鯖読みました・・・読みなおして気づいてビックリです・・・。グーグル入力のお陰で自分の鯖読みにすら気付かないなんて・・・。誰か何か言って欲しかった・・・。実際にはPV500、ニーク100　by2012.1.11）

処女作の時は大違いで、作者ガクブルでございます。

（でも嬉しかったのでかなり早めに投稿しちゃつたりした現金な作者）

それだけ見てくれてる方が多いのでありますよ。

いや、ありがたい限りではありますが、なんだか恐ろしいです。作者がこの作品を捨てた時とか失敗した時とかスランプになつた時とか

その他諸々諸々・・・。

（諦めるのも想定してる最悪な作者）

それだけの方が、「あ、コイツ結局はダメなやつだつたんだなー。ま、想像してたけど。」

みたいな反応をしてるかもしれんと考えると恐ろしい限りです。

反動で仕事やめて自宅警備員に転職してやうつかとか考えてしまつほどです。

（被害妄想酷しな作者であります）

・・・自分で書いていてつざつしたい後書きですね・・・。

ま、こんな作者でありますか、感想とか誤字脱字ですか、矛盾点とかそういうのがありましたらどうぞ送つてやつてください。

作者は喜んで投稿をスピードUPしちゃうかもしません。

・・・あ、あと読者一体型小説を目指してもいいのかなとか思つておりますので、ストーリー展開を作者に指示してくれたらそれを反映させてしまうかもしれません。

(他力本願丸見えな作者つてひどくね?)

睡眠とは現実との別れ

母親に絡まれてからネットを徘徊すること15時間半。パソコンを立ち上げてから1時間ほどは不特定多数の人間とチャットをしていた。

その最中に新しいRPGゲームを紹介された。

そのRPGを紹介してくれたのは「じーおーでいー」さんっていう人で、ネットゲームに精通しているのだそうだ。

「じーおーでいー」さん曰く、このRPGをしている大抵の人間はおもしろすぎてハマり込んでしまうため、

チャットに一度と帰つてこないんだなんて話をしていた。たまーに帰つてくる人もいるらしいが、やり込みすぎて体を壊しかね無いことから、自分に区切りをつけるために辞めたという人間もチャット内にはいた。

やつたことのある人間曰く、飽きることがないんだそうだ。

ゲーム内ではナイト、魔導師、ファイター、鍛冶、農民、等々の多種多様な職種があり、更には人間以外の異種族、エルフとかドワーフとか、犬族、猫族とかが存在しており、それらを一番最初に選択して、ゲームを進めていくらしい。

一番最初に選んだ職種、種族等によってストーリーが変化し、更には進めていくうちの選択肢にもよつてストーリーが変化するとかで、更にはパーティを組めるらしいのだが、組んだ種族、職種によつてすらもストーリーが変化するとかなんとか。

だから公開されてから、一年半、全てを攻略した人間はまだ誰も居

ないんだとか。

それを聞いて思った。

フラグがいくつあるんだよ・・・ていつかネットゲの域を超えてね?
絶対無理ゲーの域を超えてるだろ。つい。

でも、ゲーム名を調べてみて検索がヒットしたので公式ホームページへと向かうと、無料でできるらしかったのでネット上でメールアドレスとかなんとかを送ったりして登録やらを済ませて、キャラクターを作成して進めてみた。

ダウンロードが必要ないとかで、それも人気に火をつけてるんだろうなあとか思いながら始めてみる。

～第一章～

そんな文字が画面中央に出てきて、RPG始めた。
途中、第一章だが、分からぬことなどもあって、チャットや攻略ページなどを見ながらすすめていたのだが、全部で15章まであるらしいといふことも分かった。

じゃあ、とりあえず1章進めてみるか。

なんてことを思つてすすめました。

そうしたら第一章が終わつた時点で15時間半とかつていう時間が経つていた。

何氣つていうか、無理ゲーとか思つてたのにめちゃめちゃ簡単で、尚且つストーリーが凝つてるんだもん。

時計見てめっちゃびっくりしました。はこ・・・。

だって朝方の4時に近い時間になつてたんだもん・・・。

ぶつ続けでやりすぎた・・・。

これはもへ、目が赤くなつているであろうことは想像に難くない。すると、見計らつたかのよつて腹が鳴り出した。

やつべえ・・・昨日の晩からなんにも食つてねえんじやん・・・。ある意味すげえな、このゲーム・・・。

なんてことを思いつつも、とりあえず休憩を入れることにした。

・・・休憩ですかね?まだ俺はやる気満々ですからー。
この際、第一章で組んだパーティとか更にレベル上げとかしておきたいしねー。

そんなことを考えながら、一階へとそつと降りていいく。
廊下を通りてリビングに入ると、何やら台の上に食事がおいてあり、
その上に紙がおいてあった。

ゲームのやりすぎ!-

呼んでも降りてこないし、お母さん寂しくつて死んでしまいました。

息子が母親と父親と一緒に御飯も食べないよつな子になつて、お母さんは残念です。

だから死んでしまいました。

もし、お母さんを生き返らせたかったらお母さんを孕ませなさい。
あと、庭はきちんと説得しておくよう!

それから「飯はちやんとチンして温めてから食べよ。」

・・・・紙は、くしゃくしゃ丸めて「」箱へと投げ捨てた。

て「いか親父は何をしてるんだ。妻の息子へのセクハラを無視してんじやねえ！」

おかげをレンジへ入れて温め始める。

その間にふと考へてしまつた。

書き置きの中央の上4行はきっと俺がゲームのやり過ぎで疲れたんだろ？

絶対そうに違いない。じゃないと親父がアレを見過ぎすわけがない。いやあ、ゲームのやりすぎって嫌だねえ。

・・・・あ、・・・・。

ちゅうちょ、ちゅうとまてえええーー！

俺がゲームやりすぎて見間違えたにせよ、俺が母親孕ませる事を望んでるみてえになつちやつた！！

やつぱりすきて見間違えたんじやなくて書いてくれーーーーーー！

なんて事を思いながら「」箱から紙ぐずを拾い出して紙を伸ばす。読みなおして安心する。

ふう・・・・。ちゃんと書いてあつた。

よかつたよかつた。

やれやれ、自分で考えておいて母親孕ませたい的なことを思つてる、ウルトラマザコン的なしかも一番やつちやいけないことをする人間になるところだった。

危ない危ない。

・・・まあ、よくはないんだけどね。

なんて一人漫才をしつつ冷や汗をぬぐって、読みなおしてから気付いた。

『あと、庭はきちんと説得しておくれよ!』

・・・?
庭を説得?

正月の風

庭を詠得してなんが庭が生きてるみてえな言い方だなあ

こゝな過ぐまで起きてたことないし

チ
ン
ツ

お。温まつたみたいだ。やばい。超良い匂いする。

「いただきまーす」

小声で挨拶をする。

うん、うまい。

あー・・・なんか物足りないなあ・・・ふりかけかけちゃおつと
んー・・・うまつ！
あ・・・幸せだ・・・。

ガタツ

・・・な、なんだ?今、庭のほうで音がしたか?

そつとカーテンを捲る。

そこにはおどろくべき光景が広がっていた。

・・・・3人ほどの女子生徒が庭でミノムシのように何かにへるまつて寝ていました。

・・・びっくりした。いや、もつまじでびっくりした。
今までこんなことなかつたもの。
てこうか何?これ?

俺の家つて女生徒達の不可侵領域じゃなかつたのか?
いやいやいや、ていうかなんで寝袋に包まつてんの?
なんでテント張つてる人までいんの?

ていうかテントの中は一人・・・だよな?
いやいやいやいやいやいやいや・・・
でも、ほつとけないよな・・・。

あのままじゃ可哀想だ。

あんなふうに女子は外で寝るもんじやない。
それくらいは普通にわかる。

だから、帰るように説得することにした。

・・・あ、庭を説得つてこいつとか・・・。

てこうかなんで自分へのセクハラさせる内容がアレだけ詳しく書い

てあるのにこの女子たちへの説明が
一個も詳しくかかれてないんだよ！！
しかも日本語間違えすぎでんだろ！！
でも、外の女子たちも寒いだろうな・・・
今日くらい家の中に入れてやるか。

とか思いつつもちゃんと玄関へと向かう俺。
靴を履いて庭へと向かうと、寝袋にくるまる女子生徒たちは制服の
ままのようだつた。

一斉に起こしてきやーきやー言われんのも面倒だな。
近くに居る女子からひとりづつ行くか・・・。

そう思つて近くに居る女子を揺り起こす。

ガバッという感じで上半身だけ起こすと、周囲をキヨロキヨロし始めた。

俺は真後ろに立つ形になつてしまつた。
しじうがないないので肩を叩いてみた。

女性とが振り返る。

近所迷惑になるのも嫌なので、自分の指先を自分の口元に持つて行き、静かにするようにジユースチャーで伝える。

・・・・バタツ・・・・

なんか女の子の口と目が丸く開いたかと思つと後ろ向きに倒れた。
気絶したっぽい。

それ以降2分ほど揺り続けたが起きなかつた。

・・・・一体全体なんなんだろつか・・・・。

他の女子2人も先ほど同様、「揺り起こして『チラ』を見つける」とばつたり倒れてしまつた。

・・・・ホントになんなんだろ？か・・・。
テントの方は無視することにする。

きっと寝袋にくるまつてるやつより暖かいだろうしな。

もういいやと諦めて家中へと入る。

俺は楽観主義なので、絶対無理なことはしないし、やらない。
困つてゐるひとを見ると、ちゃんと助けたくなる。
でも、その人が困つてないって言うなら助けないし、本人が望んで
困つた状況に置かれているならそれを助ける必要はないと思つてい
る。

今回もその一例。

彼女らはきっと道路かなんかでたむろしていたんだろう。
それをうちの母親に見咎められて、テントと寝袋をあてがわられて
道路じや邪魔だらうから庭に通されたんだろう。
覚悟の上でそうしたのならこれ以上はもう彼女らに関わることはな
い。

いや、だつて一応、一回は起こしたんだぜ？
でも氣絶して起きなくなつちゃつたし、しづがないだろ？
うわー・・・眠い・・・

家に入り、時計を見ると既に5時半になつていた。
飯の途中だつたので残つていた飯を搔きこむ。
茶碗を水に漬け込んでキッチンにおいておく。

眠気が絶頂だったので二階へとたどり着いて、そのままベットへ倒

れこむ。

・・・・あー・・・目覚まし掛けなくちゃ明日日が出てこないから
起きりんないかな・・・

なんてことを思いつつも意識がスウッと音を立てて消えて行くのが
解った。

睡眠とは現実との別れ（後書き）

いやあ、なんか筆が進みますわ・・・。

感想くれちゃったそこの2501さん（神様第一号様）！
マジでありがとうございます。

いやあ、感謝カングエキ雨露。

たつた一人の感想で投稿する予定のなかつたこひまで投稿しちゃいました・・・。

2501さんって作者に對して魔法が使えたのね。

感想という魔法で作者が休みの日に2話も出せるようになるなんてほんとに何者ですかっ！？

全くリアルは魔法に満ち満ちていますねえ。

（ 痛い文句ですよね、わかつてます。でも感情が高ぶつて止まらないいいい！！）

なんていう冗談はさておいて。

感想、誤字脱字、誹謗中傷、矛盾点等々、2501さん（神様第一号様）みたいに待つてますのでよろしくです~。

隔離されし人間（ヒト）（前書き）

なんかみんなが見てくれてるよいつなのでもう少しひと早めに投稿しちゃ
マス。

隕離されし人間（ヒト）

なんかよく分からんが、起きたら周囲が真っ白な世界になつていて。

・・・あれ？俺って布団で寝てなかつたつけるか？

寝つけつつもそんなことを思つ。

そして見渡す周囲の光景。

360度果てしなく白い世界。

今、足をついてる硬い地面も真っ白。

しかもこゝは地平線が見えるほど広さを誇つているようだ。

別に暗いわけではないのだ。

白色電球のような光つていうのか、これはなんなんだろ？
天使の後ろに描かれるような光？みたいなので周囲全部が均一に照
らされている。

・・・てか、眠い。

夢つてこゝのは訳もなく、好きなことのデータだつたり怪物に襲わ
れるのだったり、色々と見るのだからこれくらいじゃ驚かない。

だが、ヒジョーに眠い。

夢の中つてこゝのは大抵活発に動き回れると思つたんだが・・・。
なんでこんな眠いんだ？つて言ひほゞ眠い。

夢の中で眠れを実感できるとかこゝにひともあるんだなー。

なんて事を思つて、何かをしようつとこゝは全く起きない。
だって夢なんてそんなもんだろ？

全く何もしない夢もあれば、自分がりえないような動きをするヒ

ーローみたいな夢もあるわけだし。

何も起きない状況であれば動く必要がないじゃん・・・。

夢の中でこんな事考えられる俺っていかがなものかと思わないでも
ないけど。

起きるまで待つてりやそれでOK'OK'。

とこいつ」とじであべらかいて待機。

おかしいな。なんかおかしいよ。
なんかあぐらかいて座つていたら、ひどいなと思つてたら、だ
んだんと頭がはつきりしてきた。
なんだ?

この状況？

夢にて、このあいだ頭かは、覺らすぬものなか？

ていうか俺が起きた時間から余裕で1時間は経ってないか?

これはなんかおかしいって。

だって夢つていいじゃまではつ生きり時間を意識するじつって無いもん。

なかなかよく分からんがあぐらをかいたままギヨロギヨロする俺。
……いや、こんな真っ白な世界は夢か……。

きっと中途半端な悪夢だな・・・。

微妙にベットの上の俺とか、うなされてそう。

なんかおかしくなってきてしまつた。・・・

一人で考え事して一人でニヤニヤしてるとか痛々しいな・・・

「うをう？」

ビクッとしつつも反射的に立ち上がる俺。

真後輩の方へと上方から「わな」の声が聞これた
そりや驚くよね。

痛い子たつて自覚してる時に後ろから声かけられるとか。まあ、変な声だしてしまったのはしおうがあるまい。

つて誰に言い訳してんだ？俺は・・・。

頭を振つて声のした方へと振り返る。

うんと あ、 痛い子か。
天使？かなあ？

「痛い子じやないよつーー！」

「ふえ？」

なんか変な声出た。

ていうか頭に金つていうのか黄色つていうのかわからないけれども、何か真ん中をくりぬいた円盤的なものを浮かべて、白い羽毛で覆われた翼を背中で羽ばたかせている、まんま天使みたいな格好をしている8歳？ううんと・・・10歳いつてるようには見えないよな・・・女の子に、叫ばれた、っていうのか頭の中を読まれた？

・・・痛い子じゃないのか・・・じゃあやつと小学生だらうな、
親はどうだろ？

「痛い子でも小学生でもなによ！？私はこれでもれっきとした神
様なんだけど！？」

「はー？あーはーはー。神様！？！ね。お疲れさん～。じゃあ神様、
俺をベッドの上に戻しとこへばやこね～」

そうこうつつ寝転がる。

あーやつは夢だったのか・・・。

「それではできませんし、夢でもありますから

「・・・はー？」

思わず、考えを読まれたので天使ちゃんを見あげてしまひ。

「貴殿は、佐々木 レオ♪ですね？」

「・・・はー？」

「では、業務連絡をお伝えします。貴殿、佐々木 レオ♪殿は死
亡が確認されたためにこの世界へと来ました。」

「・・・はー？」

「ここは死後の世界つて奴なのですわーーー！」

隔離されし人間（ヒト）（後書き）

仕事行く前に投稿するから後書きかいてる時間なかつたり微妙にあります。

でも忙しいのにいそとみんなの期待に答えようとかいてる作者・

・・。

ああ、でも忙しいいい。

というだけの夢を見ました。

（夢オチかいつ！！つてツツ ノミはなしで・・・）

「……は死後の世界つて奴なのですつ……」

手をまっすぐにコチラへと指さして、もう片方の手を腰に当てながら、『ドーン』とか効果音でもつけたほうがいいんじゃないかつていう感じで言われた。

もう、それはほんとにもう、小さい子が自慢気に自分のコレクションを友達に見せびらかせて、どうだー!!的な感じで言つてるようで・・・微笑ましい。いや、ある意味萌えるわ、これ。

あれ?俺つて口ひつて別にスルーできるタイプの人間だつたはずなのに?あれ?このちっちゃい子によつて目覚めちゃつた?うふふ・

・

「ひいっ!?!?なんてこと考えてるんですか気持ち悪いです死んでください死んでください死んでくださいっ!!-ていつか近寄らないでください近寄つたらあなたの臓物ぶちまけてやりますから神様権限使つてあなたをゴキブリのように潰してやりますからされたくなかつたら近寄らないでくださいっ!!-」

「・・・・」

なんか、息継ぎもせずに一言喋るたびに少しずつ後ろへと後退していく、空に浮かぶ10歳未満の自称神様少女に、そんなことを言われた。

・

・・・・・やばい、これはちょっと嬉しいかも。

なんか後ろを向けて羽をバタバタとばたつかせてものすごい勢いで逃げていく神様。

「ツー！？待て待て待てツー！」

手を伸ばして全力で走りだす俺。

幼女な神様が必死で空を飛んで逃げていたにも関わらず、僅か10秒ほどで追いついた。

けなくした。

体格の差がしかんともしかたいものがあつた。そのまま羽を無理やり抑えつけて説得にかかる。

「待て待て！！誤解だ！！別になんにもしないからっ！！！」

「離せエエエー！！触るなアアアアアアー！！！私は神様だ、頼むから犯らないでくださいいいいいいいー！」

「いや、だから人の話を聞けって……」

「だから・・・・・」

ずっとこんな感じ。この神様人の話を聞きやあしねえ……。
あ、そうだ。いいこと思いついた。こいつしてみよう。

こいつ、人の話聞かないんだつたらマジで……犯っちゃまおつかな。

ピタッ……

急に体の下で動きが止まり、静かになつたので見下ろして聞いてみる。

「俺の話、聞いてみる気ある?」

「……はい、わうわせても頂きます」

こいつして俺と神様の対話が始まった。

とつあえず、体の下から幼女を引っ張り出し、真向かいに座らせた。

「……あのひ、色々聞きたいことがあるんだけど、もしかしてお前つて俺の頭の中、読めんの?」

「お前つて酷くないですかっ!?.私はこれでも神様なんですよっ!?.」

「うわ、こいつ、ソコにツツツ「むのかよ、めんどくせー。」

「面倒くせーないですっ!..それにツツツ「んじゅいけないんですか

つ！？

「お～。頭の中読めるつてこいつのは薄々気付いてたけど、ホントみたいね」

「わ、私を騙したんですねつ！？」

別に騙してねえし。ただ、確認しただけだし。そういう甲トチリなところ、可愛いなあ！もつつ！…

「ひえつ！？」

「あー、襲わないから別にキーシナイキーシナイ。ていうか動いたら襲つちやうよ？獣の本能的なアレで、動くものに襲いかかっちゃうよ？」

「ひうつ！？動かない動かない動かない私は石像石像石像……」

ブツブツ言いながら固まつた。

さて、ここでの行動は放つておこう……。

「・・・それでさ、わざ死後の世界つて言つてたじやん？あれはビうつうじと？」

「ふえつ？まさか、死んだ」と自覚がない感じですか？」

「・・・はい？」

「えっと、火事で死んだのですが、それについて全く覚えておりま

せんか？」

「……ええっと……火事？……なんの」「ひかりや？」

「……ほんとに覚えていないの？」

キョトンとした田で「ひかりを見つめてくる。

「ひかりも覚えはない。はつきりと頷く。

「……え？あれ？おつかしいなあ……でも？……まさか……？……あ、もしかして？」

なんか幼女が顎に手を当てる、首をかしげつゝもブツブツヒリヒリやきはじめた。

「……そんな仕草もめっちゃカワイイなあ……あれ？そういうやあ……」「いつってなんなんだろ？なんか可愛い幼女（自称神様）？なんか夢みたいだ。でも夢じやない様な気がしている。

勘だけど、そして雰囲気みたいなものがだけど、これは夢ではないって告げてきている。

ていうか夢であって欲しくないって俺の本能が告げてゐる。こんな可愛い子と一緒に入られる時間は少ない、と。だったらもしかすることもある。よし、とりあえず聞いてみよ。

「あのや、お前つていつもアレだしさ、それにお前だけ俺の名前知つてるつていうのもアレ、……つてこうのかなんか不公平だし、その、名前教えてくれない？」

「あれ～？きっと知ってると思つたんだけどな～・・・でもどう
よつて消されちやつたのかなあ？」~~~~~

「・・・はい、全く聞いてなかつた。人にどう思われるかは知らな
いけど、自称人見知りのこの俺が勇氣振り絞つて聞いてやつたのに。
・・。

ここつ、もう一回聞いて答えなかつたら、身体中、舐めまわしてや
る。

「ひいつ！？私の名前は有りません！！はじめから言つてこないとお
り神様つて俗称があるだけなんです！―だからをわらないで近づか
ないでつ！―」

「・・・ふう～ん。ていつか名前自分で考えたりしたこと無いの？」

「・・・自分で考える？そんな事する必要あるの？」

「・・・え、だって不便じや、」「あなた勘違いしてるとわよ」

言葉を途中で遮られる。しかもどびきつ上から田線で。

「・・・はい？何を、・・・でしようか？」

だから俺が素で受け答えしていたのに、丁寧語になつてしまつたの
も致し方あるまい。

この幼女が凄むと怖いものがあるのだ。

「何をつけて、もともと私はあなたの中にしか存在していないもの」

夢(?)

「何をつけて、もともと私はあなたの中にしか存在していないもの」

「ええっと、神様? 言つてる意味がワカリマセン」

そこで幼女な神様は困った顔をする。

やべ、その顔も可愛いなあ。

「・・・・

・・・あれ? なんで俺の思考に反応しないんだ?

「あ、ちゅうひーーー、それを具体例に出してみましょーか

あ、聞いてたんだ・・・。

「私があなたの頭の中が読めるのは、あなたの想像がこの世界を作っているから、つまりはあなたの考えたことは世界の一部として存在するってことになるので、私に、いえ、私の頭の中にダイレクトに伝わってくるのです。不本意ですけど」

「え? 何? ジャあ俺がこの世界の王様ってこと? ていうか最期にぼそつと言つたのは何?」

「まあ、あなたが王様かつて言われますと違いますけれども、ここはあなたの妄想であり、無意識下で想像している死後の世界そのも

のとこつても過言ではないのです。そして私もあなたの妄想そのもと言つても間違えではないのです。つまり言い換えればこの世界のみに存在する神様といつても問題ないかと

「え、無視？ねえ？無視なの？・・・まあいいや、つまり、俺が神様とか、死後の世界つてこんな感じかな～つて無意識に思つてるから幼女なあなたが出てきているつて事？それつて今、俺がこんな感じで有つて欲しいって思えば姿形とか、この周りの殺風景とかも変わるものつてこと？」

「いや、それは変わらないのです。変えようがありませんわ。不可変な事実として、私はこの姿のままでしか存在できません。ただし、じうして私が口調を変える位の事は出来るんじよ。私の意思でだけじな」

「いや、一つのセリフの中で口調が変わりすぎて気持ち悪いから。それに最期にほほえつと言つた、お前の意思でつてことは別に俺がそう望んだからそつなつたつてわけじゃないじゃん！詐欺じゃん！！」

「つまるところ私は姿形を変えることはできなにつてことです（笑）

」

「いや、最期の（笑）つて何！？（笑）じゃなくて悪魔の微笑みだつたよね！？！」

「ていうかあなた気持ち悪いです

「いやいやいや、そこボソッと何言つたやつてんのー？神様なんじょー？俺のこと助けよつぜー？なんで思いつたり心握りつぶしてくれてるんですかー？」

「ほつきつ言えればそういうことが思いつきり気持ち悪いです」

「いやああああ……？ そんな大声で幼女の姿でズバッと指摘しないでええええええ！」

「ここまで俺はギャグのノリで話に乗っていた。だつて妄想とか無意識化で作られた世界とか意味分からんし。ネットでしゃべっていたノリで喋るリアルな機会なんて一切なかつたからな。ちょっと楽しくなつてノッてみた。」

「閻魔大王とか呼ばれている奴を超える気持ち悪さです」

「ここからは驚いてマジで素で聞いてしまつた。」

「……え？ 何？ 閻魔大王とか知つてんの！？」

「当たり前です。なんといっても私は神様ですから」

「……ていうか、その神様っていうか、これ俺の妄想なんじゃないの？」

「何言つてるんですかコイツ。神様なんだから人間一人くらいの妄想に入ることできるに決まつてんじゃないです、そんなこともわからんとは流石今まで女子に囮まれてるにもかかわらず決まった女子を持たず更にはリアル友達すらつくれずにネットの世界に溺れてそのせいで昼間に起きた火事にすら気付かずに寝ぼけていた最低の顔だけ男ですね。顔だけに惹かれていた女子が可哀想すぎです。気持ち悪つ」

「…………え？ 何？ 僕、神様に悪いことした？ ねえ？ なんかものすごく傷つくんだけど、事実だけに」

「」で神様が真上を見上げる。釣られて上を見上げる俺。
3秒ほどだらうか、「」に田を戻す幼女な神様。

視線を戻す俺。

目が合う。

唐突に神様はこういった。

「真似しないでください、人間の『ミミ』が」

・・・・・ヤバイっす。この幼女姿で上から田線（実際に飛んでるから上から田線）で凄い田つきで見下されて罵詈雑言とかゾクゾクしちゃ、

「ぞけんなああああああああああああああああああああああああ

！――――！」

「ぐふふうつ――？」

幼女な神様は5m程前方、俺の田線のちょい上あたりに浮いていたはずなのに、一瞬で間合いで詰められて腹部を蹴り飛ばされた。
ていうか、登場時と打って変わってキャラ変わつてないか？ こいつ。
まあ、今回は意識して、こいつがどんな反応をするかと思つて言葉で考えてみたら蹴り飛ばされた。痛え・・・。

「あ、ちょっと無駄な時間を使いましたね、『ミミ』とかも」

俺は10m程離れた所でうずくまつっていたのだが、（あ、神様に蹴

り飛ばされてそこまで飛んだらしい）神様は何事もなかつたように昔よくあつたような鎮のついた金時計みたいなのをみて、そうつぶやいていた。

俺はゆづくりとダメージを緩和しつつも立ち上がる。

「ところで佐々木 レオさん、あなたはまだ生きていたいですか？」

立ち上がった所でかなり真面目な顔、真面目な声でこう問われた。

「・・・生きたいも何も、俺は死んだ実感すら無いし、どうして死んだかも知らないし、それにこれが夢であることも疑つていな。夢にしちゃ腹がめっちゃ痛いけど」

「あなたは確実に死にました。死んだ理由は4人いたうちのテントに泊まっていた男子生徒が、3人の女子生徒は起こそうとしてたのに、自分は全く起こされなかつたからという理由で10時頃に放火、12時頃に家が全焼したからです。更にはこの世界は先程も言ったとおり現実であり、あなたの妄想ですので」

「・・・はい？え、え、ええ？ちょちょちょ、ちょっとまつてくれ。俺の死んだ理由はなんだつて？え、放火？え、うん、まあ、それはいいとしよう。良くはないけど受け入れることとしよう。え、それで何？起こしてくれなかつたからって男子生徒が放火？え、そ
れはちょっと、」

「あ、ちなみに放火した男子生徒は所謂、暴走族のトップ＆オカマつてやつです」

「・・・・はいいいいいいいい？？？？？」

「あ、あともう一つ。『ご家族は出かけており誰も居なかつたので死
亡者はレオさん、あなただけといふことになります』

「・・・あ、ああ」

「まあ、実のこといふとあなたはまだ完全に死んだわけじゃないみ
たいなんですけどね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4031ba/>

パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃうことってあるよね
2012年1月14日21時51分発行